

# 幼稚園年長児を対象とした鍵盤ハーモニカ指導に関する一考察

—芦屋大学附属幼稚園での実践を通して—

石 田 愛 子  
安 藝 雅 美

## 1. はじめに

鍵盤ハーモニカは、「小学校学習指導要領 音楽」（平成 29 年公示）において「第一学年及び第二学年で取り扱う旋律楽器」の選択肢の一つとして明記されており（第 3 の 3(5)イ），低学年の器楽指導に使用されることが一般的になっている。鍵盤により音高や音階を視覚的に把握・理解しやすい，気鳴楽器であるため歌の呼吸を活かして演奏できる，同時に複数の音を鳴らすことができるため和音が演奏できる，などの特長があり，器楽の導入に非常に適した楽器といえる。楽器としては比較的安価で，取扱いや持ち運びが簡便であることから，個人所有しやすいことも大きな利点である。ピアノに比べて小さい鍵盤は幼児の手のサイズにも無理が少なく，息を吹き込んで鳴らすことから呼吸器官の運動と発達にもつながる。これらの理由により，幼稚園における器楽指導にも広く採用されている。大阪府内の幼稚園で鍵盤ハーモニカを使用しているのは約 7 割という 2012 年の調査結果もあり，就学前教育として鍵盤ハーモニカを扱う理由として，「小学校に入つてからスムーズに音楽に興味を持ってほしい」ということが第一に挙げられている（谷村・門脇 2012）。

芦屋大学附属幼稚園においても，「就学前に鍵盤ハーモニカを少しでも体験させておきたい」という保護者からの要望があり，平成 31(2019) 年 2 月から 3 月にかけて，希望する年長児を対象に，鍵盤ハーモニカの課外活動を実施した。「幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図る」ことは「幼稚園教育要領」（平成 29 年公示）にも留意事項として掲げられており（第 1 章 第 3 の 5），また「保護者の要請により（中略）教育時間の終了後等に希望する者を対象に行う教育活動については，幼児の心身の負担に配慮」し，「幼児期にふさわしい無理のないものとなるようにすること」が求められている（第 3 章の 1）。

本稿では，附属幼稚園での実践を通して，就学前教育としての望ましい鍵盤ハーモニカ指導のあり方と，年長児を対象とした効果的な教材や具体的指導法，また指導上の課題や対応策について考察する。

## 2. 幼稚園における鍵盤ハーモニカ指導の目的

乳幼児が初めて楽器に触れるのは，おそらく乳児期の「ガラガラ」というマラカスを小さくしたような音響玩具からである。そして幼児期に触れる楽器の主なものは，カスタネット・鈴・タンバリンとなる。それらを通して，能動的に音を出す楽しさから，音楽に合わせて遊ぶ楽しさへと移行する。「幼稚園教育要領解説」においても，領域「表現」の内容に「(6) 音楽に親しみ，歌を歌ったり，簡単なリズム楽器使ったりなどする楽しさを味わう」とある。特に保育の中では教師のピアノに合わせて遊ぶことが多いため，子どもたちは教師が弾くピアノにとても興味を持ち，ピアノを弾くことにも憧れをもつことが多い。そのような中で，鍵盤ハーモニカはピアノと同じ鍵盤があり，自分でそれを弾くことができるという大きな喜びがある。

また、鍵盤ハーモニカの音を出すためには息を送らないといけないため肺活量が必要であり、その上、息を吹き込みながら手を動かし、時には楽譜や鍵盤を見ながら行うという「手と目の協応動作」を伴うかなり高度で総合的な楽器であると考えられる。したがって、幼稚園での鍵盤ハーモニカの取り組みは、幼児期の心身発達の成長とともに扱えるものである。

「幼稚園教育要領解説」には、「一方、教師と一緒に美しい音楽を聴いたり、友達と共に歌ったり、簡単な楽器を演奏したりすることも、幼児の様々な音楽に関わる活動を豊かにしていくものである。このような活動を通して、幼児は想像を巡らし、感じたことを表現し合い、表現を工夫してつくり上げる楽しさを味わうことができるようになる。さらには、教師などの大人が、歌を歌ったり楽器の演奏を楽しんだりしている姿に触ることは、幼児が音楽に親しむようになる上で、重要な経験である。このように、幼児期において、音楽に関わる活動を十分に経験することが将来の音楽を楽しむ生活につながっていくのである」とある。このように、幼稚園における器楽指導の目的は、楽器を正しく上手に演奏することではなく、幼児自らが音や音楽で十分遊び、表現する楽しさを味わうことであり、鍵盤ハーモニカは小学校への橋渡しになるものであると考える。

### 3. 芦屋大学附属幼稚園での実践

#### 3-1. 実施の概要

芦屋大学附属幼稚園では、平成30(2018)年度中、鍵盤ハーモニカを日常の保育カリキュラムには組み込まなかつたが、前述したように卒園間近の年長クラスの保護者から「就学前に鍵盤ハーモニカを少しでも体験させておきたい」という要望を受け、希望者を対象に『鍵盤ハーモニカで遊ぼう！』と題して5回の課外活動を行った。大学の附属幼稚園であることを活かし、講師として「児童教育学科の音楽・器楽指導担当の先生を招く」ことは、保護者にとっても、専門家の指導を受けることができるという点で安心と信頼につながるものであった。

今回対象となる年長児は、3年間を通して、5領域における様々な内容を身に付けてきた。年長クラスとしての1年間には、5月末に器楽合奏、11月の運動会ではマーチングと和太鼓を経験し、打楽器の経験は豊富である。5歳児の3学期ともなると小学校への意識も強くなり、年長児としての自覚と自信が芽生えている。しかしながら、小学校で習う鍵盤ハーモニカについては3年間一度も経験がなく、憧れている。そのような時期に「鍵盤ハーモニカで遊ぶ機会がある」事を伝えたところ、21名中18名から参加の希望があり、子どもたちの意欲と関心の高さが実感された。階名や鍵盤についての知識や理解は、ピアノを習っている子どもと全く初めての子どもでかなり個人差がある。日常のクラスでは階名唱を習っていなかったが、《ドレミのうた》などを通じて「ドレミファソラシド」の音感は身に付いている。

#### 『鍵盤ハーモニカで遊ぼう！』

- ・日程：平成31(2019)年2月6・13・19・26日、3月6日（全5回）午後2時～2時45分
- ・担当：安藝（園長）・石田（大学）
- ・ねらい：①鍵盤ハーモニカに触れ、いろいろな音を出して楽しむ。  
②鍵盤と音の並び方の規則性に気づき、階名唱に親しむ。  
③みんなでうたったり、リズムあそびをしたりして、音やリズムを合わせる楽しさを味わう。

平成31(2019)年2月初旬から3月中旬の卒園式までの6週間に、ほぼ週一回のペースで開催できるのは5回が限度であったため、全5回シリーズとした。附属幼稚園は大学の教育・研究の一翼を担っており、大学教員も附属幼稚園の各種行事に様々な形で参画しているため、今回も大学教員を兼務する園長と大学教員が連携して指導にあたることとした。楽器は幼稚園の備品であるスズキ「メロディオン」を使用し、受講希望者は唄口とテキスト『メロディオンのほん』を各自購入することとした。

### 3-2. 指導計画

全5回の指導計画は次のとおりである(表1)。各回の活動は、小学校の授業時間と同じ45分間とした。

表1

回	テーマ	ねらい
1	・けんばんハーモニカって なあに? ・けんばんのひみつ	・楽器の名前、各部の名称、扱い方を知る。 ・鍵盤の並び方に気づく。 ・吹いて鳴らすことに気づき、いろいろな音を鳴らして楽しむ。 ・ドの音で、歌に合わせてリズム奏する。
2	・どんぐりさんとそらまめさん ・どんぐりさんのおとなりは	・吹き方(タンギング)について知る。 ・ドとソの鍵盤の位置がわかる。 ・ドとレの音で、歌に合わせてオステイナート奏する。
3	・3つのひとでふいてみよう ・だいすきなチューリップ	・タンギングを使ったリズム奏について知る。 ・3音(ドレミ)の階名唱に慣れる。 ・指使いに気をつけて、3音の順次進行(上行・下行)を弾く。
4	・パンやさんにいこう ・5つのひとでふいてみよう	・調性、強弱、吹き方による表情の変化を聞く。 ・いろいろな指使いで3音の順次進行(上行・下行)を弾く。 ・5音(ド～ソ)の階名唱に慣れる。
5	・メロディーをふこう ・おさらい	・5音の順次進行、3度跳躍が弾ける。 ・階名唱したメロディーを鍵盤ハーモニカで吹く。

(註: 鍵盤ハーモニカは気鳴楽器であるため「吹く」ものであるが、本稿においては鍵盤の操作については「弾く」と表記している)

### 3-3. 使用テキスト・使用教材

#### ①『メロディオンのほん』(鍵盤学習研究会 編著)

鈴木楽器製作所が発行している「メロディオンに初めて触れる園児・児童のためのメロディオン導入本」である。公式サイト(<https://www.suzuki-music.co.jp/products/56260/>)に紹介されているように、「音あそびの要素をたくさん取り入れ」、「音あそびを楽しみながら、自然とメロディオンの演奏ができるようになる内容」となっている。カラフルなイラスト中心で、本文はすべて平仮名表記であり、園児にとっても親しみやすい(「この本のつかいかた」や「学習のねらい」など、指導者向けのヒントやコラム欄は通常の漢字仮名まじり表記)。各部の名称、音の出し方、鍵盤のドの位置、息づかい、タンギング等の説明に半分近くのページ数を

割いており、初回からどんどんページをめくって先に進める感覚がある。ただし薄い冊子のため掲載曲は少なく、階名つきの大きなサイズの楽譜は《あらさんのおはなし》《ほたるこい》《チューリップ》《どれみあそび》《むつくりくまさん》《おどるポンポコリン》の6曲のみである。これら主要6曲の要素と学習内容を表2にまとめる。

表2『メロディオンのほん』掲載の主要6曲の要素と学習内容（Noは筆者）

No	曲名	要素と学習内容
1	あらさんのおはなし	単音（ド）によるリズム打ち（合いの手）
2	ほたるこい	ドとレの2音によるオステイナート（一，一，三拍子）
3	チューリップ	ドとレとミの3音による順次進行、上行・下行
4	どれみあそび	ドレミファソの5音による上行・下行、ソルフェージュ
5	むつくりくまさん	ドレミファソの5音による、3度跳躍を含むメロディー
6	おどるポンポコリン	様々なリズム、3度跳躍を含むメロディー

初めの3曲はドから順に一音ずつ音域を広げていき、4曲目で5本の指でカバーできる5音の順次進行に到達する。5曲目と6曲目も演奏部分の音域は5音に収まっているものの、3度跳躍を含み、運指に留意して5指を均等に使う必要があるため、5曲目以降、難易度は急上昇する。運指については、No1～4の各曲で使う鍵盤と指が図示されているが、その図中にも楽譜にも、指番号の表示はされていない。

購入させたテキストは最大限活用しつつ、無理なく学習を進められるよう、以下②③の教材も一部併用した。

## ②『楽しい音楽遊び教材集』（教育研究グループ「音楽グルメの会」編、教育芸術社）

保育現場で活用できる「歌とリズム」の教材10曲、「歌と鍵盤ハーモニカ」の教材8曲、全18曲を収載している。鍵盤の位置や演奏のしかたを説明するとき、歌にのせると、子どもたちの耳と心によりよく浸透することから、ドとソの鍵盤の位置を説明するときには《どんぐりさんのおうち》<sup>1)</sup>を、5指5音のポジション練習には《とんとんとんとん ひげじいさん》<sup>2)</sup>を、3度跳躍の練習には《どれみでのぼろう》を適宜アレンジしながら繰り返し、学習内容の定着をはかった。

## ③『マサさんの さあ！はじめよう 鍵盤ハーモニカ』（松田昌 著・演奏、ヤマハミュージックメディア）

「低学年から高学年児童まで楽しく学べる」よう、基礎から発表会用アンサンブル・レパートリーまで、全26曲を収載している。見開き左側の子ども用楽譜は大きく、音符の中に音名が記され、使う鍵盤と指番号の図や、かわいいイラストも添えられ、親しみやすく、わかりやすい。右側には指導のポイントとピアノ伴奏譜が掲載され、指導者にも使いやすい仕様となっている。鍵盤の位置だけではなく、音の強弱や表情にもポイントを置いた内容で、《きゅうきゅうしゃ》《だいすきなパン》《おなかがすいた》《くろこげパン》などを併用教材として活用した。付属の「模範演奏&ピアノ伴奏CD」は開始前の雰囲気づくりに、BGMとして毎回流すようにした。

#### ④その他

鍵盤楽器指導の前提となる階名唱、模唱などのソルフェージュ、指をほぐし動きをよくするための手あそび歌、楽器や曲に親しむための歌唱など、みんなで歌う活動を数多く取り入れるようにした。また、「スズキ メロディオンマグネット掛図」を黒板に張り、階名唱や運指を指導する際の補助教材として使用した。

### 3-4. 実践と考察

#### 第1回「けんばんハーモニカってなあに?」「けんばんのひみつ」

先生の自己紹介のあと、ピアノのまわりに集まって、はじまりのうた「きょうからはじめよう」<sup>3)</sup>を歌う。ピアノの黒い鍵盤に注目させ、二つ並んだ黒鍵に右手の「チョキ」を載せて二音同時に、三つ並んだ黒鍵は一本指で一音ずつ、「チョキ、イチ、ニ、サン」と言いながら、音の低い方から高い方へ順に鳴らしてみるよう促す。一巡したら、ピアノで鳴らした黒鍵を「今度は鍵盤ハーモニカで鳴らしてみよう」。鍵盤の並び方は同じでも、ピアノとちがって鍵盤ハーモニカは押すだけでは鳴らないこと、「吹いて鳴らす」ことに子どもたちは気づく。さっそくホースをつないで息を吹き込んで、黒鍵で鳴らす「クラクション」や「救急車のサイレン」で教室は大騒ぎ! ここであらためて、楽器を鳴らすときの「おやくそく」を確認する(合図があるまで鳴らしません、など)。教科書のイラスト(p.5-6)を見ながら「何の音かな?」と音あてクイズとまねっこあそびを楽しんだあと、「チョキ」から見つけるドの鍵盤を覚えて、《ありますのおはなし》を歌いながらリズム打ち(p.13-14)。おわりのうた「きょうはこれでさようなら」<sup>3)</sup>を歌って、盛り沢山の第1回は終了。(文中のp.は『メロディオンのほん』の掲載ページ。以下同じ)

#### [考察]

初めての鍵盤ハーモニカに子どもたちは興味津々。保育者が「今から鍵盤ハーモニカやるよ!」というと、小学校に上がった気分になったようで「やったー!」「小学校でやってるやつだよね!」「私やってみたかったんだ!」と意欲的な声が多かった。“もうすぐ一年生”という期待にはずむ年長クラスの子どもたちにとつて、一足はやい“はじめての教科書”配付もわくわくするものようであった。第1回は「音を鳴らして楽しむ」ことに焦点をあてたが、複数の黒鍵を鳴らす「ブッパー」や「ピーポーピーポー」に夢中になったのに比べると、覚えたての「ド」を歌の合いの手に鳴らすのはやや物足りない様子であった。たくさん鍵盤が並んでいるのだから、いろんな音を鳴らしたい!という気持ちがありあり。やはり鍵盤ハーモニカは「旋律楽器」である。

#### 第2回「どんぐりさんとそらまめさん」「どんぐりさんのおとなりは」

始まる前にトイレと手洗いをすませるよう声をかけ、全員そろったら、はじまりのうた「きょうもみんなであそぼうよ」<sup>3)</sup>でスタート。引き続き《どんぐりころころ》をみんなで歌い、《どんぐりさんのおうち》に繋げる。鍵盤のドの位置を再確認して、「こんにちはー」のリズムで「ドードドドー」。次に「そらまめさんのおうち」(《どんぐりさんのおうち》の2番)を歌ってソの鍵盤を見つけて、「あそびましょー」=「ソソソソソー」。単音でリズムあそびのあと、手をほぐすため、《むすんでひらいで》を歌いながら手あそび、次に「一、一、三拍子」のリズム打ち。そのリズムをソの音で、《むすんでひらいで》のピアノにあわせてリズム奏。「ドのおとなりのレ」を新しく覚えて、《ほたるこい》(p.15-16)に挑戦(レとドの一、三拍子)。鍵盤ハーモニカのお手入れもきちんとしてから、おわりのうた「きょうはこれでさようなら」を歌って終了。

## [考察]

鍵盤ハーモニカの基礎技術としてタンギングがある。「舌の動きによって空気の流れを制し、音の区切りや立ち上がりを明瞭にすること」(山本・筒井)で、『メロディオンのほん』でも『『とう』といつてふこう』「メロディオンの言葉として『トウ』でいさつをします」という説明がなされている(p.12)。同音連打は指で弾き直さなくてもタンギングができるということを手本で示すが、口の中は指の動きのようには見えないので、子どもたちは把握しづらい様子であった。タンギングのシラブルについては、「けんばんさんと おはなしするときは ワン、 トウ、 スリーの トウトウトウー」(メロディーは《どんぐりさんのおうち》)と歌つて説明するとわかる子も多かったが、実際は無聲音の「トウ」なので、よくわからないまま一生懸命に鍵盤を弾き直している子どももいた。低学年を対象とするタンギングの指導についてはいろいろな見解があり(奥田 2016), 「たねとばし」(藤原 2010)のようなユニークな指導法がある一方、「同じ音を繰り返すときは、タンギングでも、指で弾き直しても、どちらでもよい」(松田 2015)とする指導書もある。指で弾き直しをしている子どもがタンギングできていないとは限らず(「カエルのほっぺ」になっている子は「ふーふー」吹いている), タンギング指導を徹底するには時間をかけた個別指導が必要になる。運指についても、単音や2度音程では指使いを決める(守る)必然性がないため、子どもたちは弾きやすい指で弾いている。次回は音域が3音に広がるので、指使いを意識するようにしていく。

## 第3回「3つのひとでふいてみよう」「だいすきなチューリップ」

いつものように、はじまりのうたでスタート。楽器の準備をする前に、唄口をくわえてホースの端を頬に近づけて、「トゥー」と「フ~」で吹き比べ、吹きつける風のちがいを感じてみるよう声かけをする。「けんばんさんと おはなしするときは」を歌ったあと、ドとソを「トゥー」の吹き方で、元気よく「こんにちはー!」。ドレミを使った階名唱と模唱のあと、「ゆびのたいそう」(「ゆびのたいそう グッパックグッパツ いちのおゆびで トントントン」)で右手1, 2, 3の指を意識させる。《だいすきなパン》をまず歌詞で、次に階名で歌い、3本の指を使って吹くことに挑戦。《チューリップ》(p.17-18)を歌いながら、ドレミの部分は鍵盤ハーモニカで吹いて、2曲とも完成。

## [考察]

子どもたちは、はじまりのうたをすっかり覚えて、始まる前から楽しそうに口ずさんでいた。楽器を使う前は手をきれいにする、という習慣も定着してきた。しゃぼんだまをふくように「フ~」と吹くのと、「ワン、トウ、スリー」の「トウ」で吹くのでは、出てくる風(空気の勢い)のちがいを感じ取ることができたようである。タンギングという言葉を覚えさせることはしていないが、「トウ」のほうが音がはっきりするということに気づき、基本的な吹き方として少しずつ身に付けることができればよいと考える。単音や2音では必然性が希薄なため、前回まで指使いについては明確に指示しなかったが、今回は3音を使うため、右手親指から順に指を折って「1, 2, 3」とかぞえ、その指で「ド, レ, ミ」と順に弾くように説明したところ、その指使いは子どもたちにとっても自然であり、理解しやすかつたようである。ただ、左利きの子はどうしても唄口を右手で支え、左手で鍵盤を触りたくなるようで、机間巡回により個別に確認する時間が必要である。ドの鍵盤の位置については、「どんぐりさんのおうち」や「チョキ、ド」を繰り返すうち、どの子も鍵盤の並び方から見分けられるようになっている(鍵盤に色つきのシールを貼ったりする必要はないと考える)。食べ物が出てくる歌が好きな子どもたちに《だいすきなパン》はやはり好評で、階名唱も演奏もすぐできるようになった。しっかりと歌える曲は、鍵盤ハーモニカでも自信を持って吹くことができている。

#### 第4回「パンやさんにいこう」「5つのとにちようせん！」

はじまりのうたのあと、タンギングとドレミの復習。ドとミとソの音をグループに分けて、順に、また同時に重ねて、「こんにちはー！」(p.11-12)。《チューリップ》と《だいすきなパン》を階名唱してから吹く。「ゆびのたいそう」できょうは右手2, 3, 4の指を意識させ、その長い3本の指で《おなかがすいた》に挑戦。「おなかペコペこだから、ちょっとさびしく、フーッとふいてみよう」。《だいすきなパン》と《おなかがすいた》の範奏聴き比べと吹き比べのあと、黒鍵を使った《くろこげパン》へ。もう一度、白鍵に戻って、いよいよ5本の指で「ドレミファソ」。《どれみあそび》(p.19)で階名唱と模唱をはさんで5指5音に到達。

##### [考察]

ドとミとソを重ねて「こんにちはー！」と元気よく吹けば吹くほど、子どもたちのほっぺはカエルになり、手はリズムどおりに鍵盤の上で動いている…。音やリズムに合わせて「弾き直す」ほうが、子どもたちには自然なのかもしれない。前回好評だった《だいすきなパン》（ハ長調）と《おなかがすいた》（二短調）の聴き比べ、歌い比べは楽しめたが、《おなかがすいた》は4の指から始まるので、そもそも指使いが難しかったようである。「みつ」の指で弾くように言葉かけしたが、やはり必然性がないので、使い慣れた3の指から弾いてしまう子も見られた（5本指すべて使うことに慣れたうえで、その一部分を使う、という手順のほうが理解しやすいのかもしれない）。三つ並んだ黒鍵は長い3本の指で弾きやすいので、2, 3, 4の指の練習を目的とするなら《くろこげパン》のほうが適していた。動かしにくい4(薬)指、弱い5(小)指などを使うようになると、ますます到達度に差が出てくるのでフォローが必要。唄口を深く咥えすぎる子どもも散見されるので、注意したい。なお、音を鳴らし始めると夢中になってしまう子どもたちに「音出しストップ！」の合図にはタンバリンが効果的であった（トレモロ奏でcresc.のあと、fで一発！）。毎回、子どもたちには楽器をきれいしてからしようように指導しているが、鍵盤の汚れが気になるのか、始まる前に念入りにティッシュで拭く子もいる。楽器の状態を良好に保つためにも、使用後のつば抜きチェック等こまめな手入れが欠かせない。次回は最終回、お迎えに来た保護者の前で、できるようになった曲を少々披露する予定。

#### 第5回「メロディーをふこう！」「おさらい」

はじまりのうたのあと、手あそびしながら《トントントン》をみんなで歌う。「ド、ド、ド、ド、どんぐりさん」と替え歌（ド→どんぐりさん、レ→レモンさん、ミ→みかんさん、ファ→ふわふわさん、ソ→そらまめさん）を歌い、次はドレミの部分を吹いてみる。「ド、ド、ド、ド、つぎのゆび～」と歌って、隣の指へと順に使うよう促す。《どれみでのぼろう》でドからソまでの順次進行と、3度跳躍を含む3音（ド、ミ、ソ）の上行と下行を練習。3度跳躍を含む3つの音でごあいさつ（ドミレで「もういいかい」「まあだだよ」、レミドで「もういいよ」など、模唱と聴奏）。少し早めにお迎えに来られた保護者の方に、きょうまでにできた曲《チューリップ》《トントントントンひげじいさん》《どれみでのぼろう》を披露。最終回バージョンのおわりのうた<sup>3)</sup>を歌って終了。

##### [考察]

5音の順次進行まではスムーズにできたが、指をとばして3度音程を弾くのは難しかったようである。ドからソまでの各音と右手の各指を対応させる基本ポジションがまだ定着していない段階では、3度跳躍を含む3音の階名模唱はできても、鍵盤上で音に対応した指を動かすのは難しかった。「ドミレ」「レファミ」「ドミレファミ」と順に広げて「ドミレファミレド」まで進めることができれば、《むっくりくまさん》の一部メロディー奏に発展できると考えたが、今少し時間が必要であった。あと1回あれば、《むっくりくまさん》の前に《かえるのうた》を入れて、1から4までの指を使う「ドレミファミレド」に慣れてから順

番を入れ替えて「ドミレファミレド」に発展させることもできたと考えられる。保護者に発表するレベルには至らず、活動を参観していただく形となつたが、子どもたちが楽しそうに取り組んでいたこと、小学校前に楽器に親しむ機会が持てたことについては概ね好評であった（詳細は後述）。



図1 指導の様子



図2 練習する子どもたち

#### 4. 事後アンケート

最終日に保護者へアンケートを行った。以下は、その質問と回答である。

1) 「鍵盤ハーモニカで遊ぼう！」に参加されて、お子様の様子はいかがでしたか？

- ・毎回とても楽しかった様子で報告してくれました。
- ・初心者にもわかりやすかったようです。初めて触れたので楽しんでいました。
- ・習い事で音楽関係は何もしていなかったので、音楽に触れる機会が出来とても良かった。
- ・毎回楽しみにしていました。帰ってからお歌も歌っていました。
- ・同じレベルのお友達と一緒にスタートできたことが良かったです。
- ・ピアノを習っていることもあり、すんなり楽しく鍵盤ハーモニカを演奏できるようになりました、喜んでおりました。
- ・ピアノを習っているせいか、簡単だと言ってました。でも楽しく参加してました。

2) 今回の講座につきまして、感じたこと、ご要望など、ご自由にお書きください。

- ・たった5回だけでしたが、思ったよりもみんな上手に出来ていたのでびっくりしました。一年間もやつていたらもっと上達していたと思うので、もっと長い期間もしくは課外で取り入れて頂ければ嬉しいです。
- ・小学校に入る前に少し慣れようという講座なので、5回が適当だったかもしれませんがあつてもよかったです。
- ・少しでも経験できてよかったです。
- ・鍵盤ハーモニカは楽しい！という気持ちで一年生になれそうで良かったと思います。
- ・お披露目のボリュームが少なかった。練習風景も参観したかったです。
- ・幼稚園の間に少しでも鍵盤ハーモニカに慣れ親しむことが出来たのがとても良かったです。小学校に繋いでいただけたことが良いと思いました。
- ・幼稚園の時間内にやっていただけるとよかったです。

#### 5. おわりに

以上、全5回の活動を終えて、子どもたちは鍵盤ハーモニカの基本的な扱い方を知り、ドからソまでの階名唱と、その音域の順次進行を中心としたメロディー奏を体験した。あくまでも希望者を対象とした課外活動としての位置づけであったため、楽器やテキストの持ち帰りや自宅練習は一切なく、子どもたちが鍵盤ハーモニカに触れるのは均等に週一回45分間のみであったが、かえって新鮮味を失うことなく、集中して一回一回を楽しむことができたといえる。タンギングや運指について十分な指導をする時間はなかったが、当初の3つのねらいは達成できたと考える。小学校でも自信を持って鍵盤ハーモニカを取り組んでくれることを期待したい。「幼稚園教育要領」において、小学校に向けて「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として、10の項目が挙げられているが、その中の特に（3）協同性（4）道徳性・規範意識の芽生え（6）思考力の芽生え（9）言葉による伝え合い（10）豊かな感性と表現の、5項目において育ちが見られた。

なお、各回の考察で述べたように、タンギングと運指の指導には、適切な教材と時間をかけた個別指導が

必要である。運指については、「この指のほうが弾きやすい」もしくは「この指でなければ弾きづらい」といった必然性があるとき、指使いの指定が子どもたちにとっても無理がなく、理解を伴うものになる。指番号1・2・3・4・5と階名（ドレミファソ）を常に対応させる方法は導入の時期に限られるべきものではあるが、5本の指を均等に操作できること、またスムーズな演奏のために不可欠な運指への意識づけをすることは、将来的に他の鍵盤楽器を学習する際にも有益なものとなろう。タンギングについても、「舌を使って音を区切るほうがうまくいく」と感じられるような曲（たとえば《ゆかいいなまきば》の中間部のはやい同音連打など）であれば、より効果的に身に付けることができると考えられる。また、他の鍵盤楽器への移行・発展という視点では、「鍵盤楽器の場合、両手で演奏することが求められるため、初步の段階から簡単な音階や旋律を左手で弾く学習も積極的に採り入れるべきであろう」との指摘もある（山本・筒井2016）。鍵盤ハーモニカを吹くとき、左手を唄口に添え右手で鍵盤を操作するのが基本姿勢であるが、ドから上へ音を重ねていく右手に対し、ドから低いほうに降りていく音を学ぶには左手が適している。鍵盤ハーモニカは合奏でもメロディーを担当することがほとんどであるが、たとえば低音の動きを左手で担当するパートを作るのも一つの方法であろう。これら奏法上の課題についての実践的な指導法については、今後の検討課題としたい。

附属幼稚園での取り組みにおいては、アンケート結果も踏まえて、来年度はクラスの保育の中で年長児に1学期から徐々に無理なく進め、自由時間にも子どもが遊びの中で練習できるように準備する予定である。また、今回とは違った子どもの成長が見られることを期待したい。

## 注

- 1) 《どんぐりさんのおうち》の歌詞と教育的意図については山本・筒井（2016）を参照されたい。
- 2) 《とんとんとんとん ひげじいさん》の曲名については他の表記や名称も存在する。
- 3) 鍵盤ハーモニカの時間の始まりと終わりに、毎回みんなで歌う歌を設定した。《ポンポンピアノ》（小林純一作詞・ドイツ曲）のメロディーを短縮・アレンジして、次のような歌詞をつけたものである。はじまりのうた「きょうから はじめよう けんばん ハーモニカ ドレミファ ソソソ みんなでふいたら たのしいな」。2回目以降は冒頭を「きょうもみんなで あそぼうよ」に変えた。おわりのうた「きょうはこれで さようなら けんばん ハーモニカ ドレミファ ソソソ またらいしゅう ふきましょう」。最終回は後半を「いちねんせいに なつたら もっとじょうずに ふきたいな」とした。

## 参考文献

- ・神原雅之・鈴木恵津子 編著『改訂 幼稚園教諭・保育士養成課程 幼児のための音楽教育』教育芸術社, 2018.
- ・有本真紀・阪井恵・津田正之 編著『新版 教員養成課程 小学校音楽科教育法』教育芸術社, 2019.
- ・鍵盤学習研究会 編著『メロディオンのほん』鈴木楽器製作所, 2017.
- ・教育研究グループ「音楽グルメの会」編『楽しい音楽遊び教材集』教育芸術社, Kinder 音楽グルメの会 Music Winter Seminar（講師：久保修三, 2019.1.19）配付資料.
- ・松田昌 著・演奏『マサさんの さあ！はじめよう鍵盤ハーモニカ～ピアニカ・鍵盤ハーモニカの指導者とピギナーのために～』ヤマハミュージックメディア, 2015.
- ・藤原勇『新版 さあ、はじめよう！初めての鍵盤ハーモニカ発表会すぐに使える曲集・伴奏CD付一』全音楽譜出版社, 2010.
- ・谷村宏子・門脇早聰子「就学前教育としての鍵盤ハーモニカの導入の指導に関する一考察」関西学院大学リポジトリ, 2012.
- ・山本美紀・筒井はる香「初等教育における鍵盤ハーモニカ学習の役割」奈良学園大学紀要, 2016.

- ・平塚菜津美・島畑斉「鍵盤ハーモニカの運指の定着を目指した授業実践研究」『教育臨床総合研究 15 2016 研究』2016.
- ・奥田順也「小学校低学年を対象とする鍵盤ハーモニカの指導の今日的課題に関する一考察」玉川大学芸術学部研究紀要, 2016.
- ・新井恵美「鍵盤ハーモニカの指導について—教則本の分析を通して—」宇都宮大学教育学研究紀要, 2016.
- ・新井恵美「鍵盤ハーモニカの指導への試み—教員への研修を通して—」宇都宮大学教育学部教育実践紀要, 2017.

